

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



今年もベラルーシのチェルノブイリ汚染地の子どもたちを
ロシアの非汚染地域の“ノボ・キャンプ”に送り出します
チェルノブイリ保養支援カンパにご協力下さい！

今年の夏もベラルーシの汚染地クラスノポリエから、5人の子どもたちをロシアの非汚染地スラーシュにある「ノボ・キャンプ」に送り出す「保養支援」に取り組みます。「ノボ・キャンプ」は、ロシアのNGO「ラディミチ〜チェルノブイリの子どもたちのために」が運営する夏キャンプです。若いボランティア・スタッフも参加して半年以上かけて準備し、子どもたちの自発性を尊重しながら様々なサークル活動、文化・スポーツなどのイベント、甲状腺エコー検診などの健康チェックも行われます。

私たちは、ベラルーシの汚染地支援のひとつとして、2008年から毎年5～10人の子どもたちの「ノボ・キャンプ」参加費と交通費の資金援助に、皆さんのカンパのご協力を得て取り組んできました。私たちの資金力で支援できる人数は限られるので、できるだけ保養の機会の少ない家庭の子どもたちに参加してもらえようと、クラスノポリエの小児科医ベーラさんに人選をお願いしてきました。数年前にベーラさんが病気で倒れてからは、引き続き地域の学校の先生方がラディミチとの連絡係を担当して下さっています。

クラスノポリエでは、事故から33年経った今年も年に1回、国の予算で、学校から学年やクラスごとに約1ヶ月間の非汚染地での保養が行われています。しかし、保養施設に空きがある時に子どもたちを受け入れるというシステムなので、必ずしも「保養」に最適な気候の頃に施設が利用できるわけでもないようです。また、個人で参加する夏キャンプや旅行は、それぞれの家庭の事情もあって、必ずしも全ての子どもが行けるわけではありません。



昨年夏には、事務局の振津が初めて「ノボ・キャンプ」に参加し、「オリヅル教室」など開催して子どもたちやスタッフの方々と交流してきました。キャンプに参加した子どもたちは、「ノボ・キャンプが大好き！」「大きくなったら、ボランティア・スタッフとして参加したい」「参加させてくれてありがとう！」と、3週間のキャンプ生活について目を輝かせながら語ってくれました。事故から30年以上を経ても続けられているこのようなキャンプは、日本でフクシマの子どもたちへの「保養支援」に取り組む上でも、いろいろと参考になるのでは…と改めて感じました。

このような私たちのチェルノブイリの子どもたちへの「夏キャンプ支援」は、ささやかではありますが、毎年、続けていくことは、汚染地に暮らす子どもたちの心身の健康にとって大切なことです。今年も5人の子どもたちが参加するには総額約20万円の資金が必要です。皆さんの保養支援へのご協力をお願いします！



カンパ・会費の納入ありがとうございました！

(2019.4.5~2019.6.19)

曾我日出夫 松本郁夫 門林洋子 公庄れい 田原良二 徳井和美 寺本和泉 田坂富士男
奥平純子 前田佐和子 横山清美 江端久美子 北川諭 長谷川育子 加藤純子 淡川典子
東野セツ 池田春美 阪口博子 田川克孝 中井かをり 斎藤直樹 泉 迪子 森 重子 赤部三
千代 田岡ひろみ 小西ゆみ子 田代牧夫・水都子 庄田政江 小谷美智子 金子龍太郎 伊藤勝
義 辰野純子 辻本義信 藤田達 松田高志 吉崎恵美子 斉藤玖仁子 井上和歌 村上玲子
田中章子 大久保利子 清水昭 北田万寿夫 匿名1名 (順不同・敬称略)

チェルノブイリ事故 33 年の集い

ーチェルノブイリとフクシマを結んでー フクシマ事故 8 年、これからも共に歩むために ・事務局報告：チェルノブイリとフクシマを結ぶ ・対談：野口時子さん、佑芽さんを迎えて 母娘で語るフクシマ事故 8 年の体験と想い

2019 年 4 月 21 日、大阪市立総合生涯学習センターでチェルノブイリ事故 33 年の集いを行いました。70 名余の参加がありました。

今年は冒頭に、辛いことですが、「救援関西」発足時からの仲間、クラスノポリエの小児科医師ベラ・ルソーバさん、宝塚の中川慶子さん、「ペンギン・ペリカン」の大田美智子さんの訃報から始めなければなりません。そして、チェルノブイリ・フクシマ、更に全ての核の被害者に、全員で黙とうをささげました。

続いて「救援関西」代表である長崎被爆者・山科和子さんが挨拶されました。97 歳になる山科さんは、集いが始まる前は「長崎被爆者としてチェルノブイリ救援を始めた思い、続けてこられたことについて皆さんへの感謝を話す」と話されていました。でも訃報を聞くうちに、昔の事、被爆後の日々の思いがこみ上げてきて、直後の惨状、飢えと屈辱、父母兄弟も人生もすべてを失ったこと、健康の不安、そして受けた差別を語られました。「あんたは体に放射能があるから」と職も追われたとも。核の被害者としての原点、口惜しさが伝わってきました。

事務局の振津より、33 年を迎えるチェルノブイリの現状と 8 年を迎えたフクシマの現状の報告と、さらにチェルノブイリとフクシマを結び、チェルノブイリの経験に学びながら福島の実情を知り被害者の健康と生活・権利を守る活動を共に取り組もうとの提案がありました（P4）。

そして、本日のゲストの野口時子さん・佑芽さんとの対談に入りました（P8）。

《意見交換》

会場からは、対談を聞いて様々な感想・意見をいただきました。

関西で保養を行っている方は、野口さんが福島で感じられているのと同じように 8 年経って参加者も変わり、このまま継続すべきか悩んでいたが、しかし、立ち止まって、お母さんたちに直接お話を聞く中で、やっぱり心配している方、今になって、新たに当時のことを話してくださる方もいて、「これから」という思いです、と話されました。

また、子どもたちは、当時抱えていた辛さを認識できないで過ごし、成長して、なんだか分からない「生きにくさ」に新たに気づくことがある。悲しみや不安は、閉じ込めてしまったり、認識されないと解消できない。「聞き役」が必要という指摘がありました。

わが子のために活動を始めたという野口さんですが、わが子だけではありません。「救われたお母さんたちは多かったと思います」という感想もありました。

オリンピックが来ようが、政府がどんなキャンペーンをしようが、東日本大震災により東京電力福島第一原発事故で起こった放射能汚染の問題はまだまだ終わりとは言えません。お母さんたちの心配は当然ですが、それが言い出せなくなっています。

一組の母娘のお話を、直接聞いてもらえた貴重な機会でした。新しいつながりも模索し、被ばくを避け、人々の健康と生活を守る施策を国の責任で行わせるように連帯していきましょう。そしてこれ以上核被害を繰り返さないために、連帯して核の軍事利用も平和利用も無くすことを目指しましょう。

チェルノブイリとフクシマを結んで

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西・事務局

チェルノブイリ 33 年～原発重大事故の被害は終わらない

チェルノブイリ事故から間もなく 33 年を迎えますが、事故の被害は終わりません。私たち「救援関西」がチェルノブイリ・ヒバクシャへの支援・交流を始めてから今年で 28 年です。私たちは、この 28 年間、チェルノブイリ被災地の友人たちとの交流を通じて、原発重大事故が被害者ひとりひとりの人生を大きく変えてしまった様子を目の当たりにしてきました。

* 未だ居住できない広大な汚染地

チェルノブイリ事故被災地では今も、原発から 30 キロ圏内はもちろんのこと、30 キロ圏外にも人々が居住できない広大な地域（1989 年作成の汚染地図でセシウム 137 の汚染レベル 40 キュリー/km²以上、等）が広がっています。昨年、「移住者の会」のジャンナさんの案内で訪問した彼女の故郷ナローブリアでは、居住禁止地区での養蜂や馬の放牧、果樹の植樹などが、事故から 30 年余を経てやっと森林局の試験的事業として始められていました。しかし、森林の多いこの地域の放射線量はまだまだ高く、一般の人々が帰還して生活できるようになるにはほど遠いのが現状です。

* 「移住者」の訴え～次世代への心配、辛い体験を繰返さないで

事故直後、あるいは 1991 年の「チェルノブイリ法」制定によって高汚染地から移住をした人々は、移住先の住居、引っ越し費用と 4 ヶ月分の給与を一時手当として受給しましたが、故郷から離れた慣れない土地で「ゼロからの生活」を強いられました。あれから約 30 年。事故当時の幼子は親となり、森や小川のある自然豊かな「故郷」を知らない次の世代が生まれ育っています。ジャンナさんたちは、「チェルノブイリ・ヒバクシャ二世」である孫たちの健康や、被害者としての権利が今後も保証されるのかを心配しています。（「チェルノブイリ法」では、事故後に生まれた被害者の子ども[二世]も支援対象になっているが、ベラルーシでは「被害者証明カード」は一世被害者にしか交付されていない。）ジャンナさんたちは、「私たちのような辛い体験は、もう世界中の誰にも経験してほしくない」と訴えています。

* 被ばくのリスクに向き合い今も続けられている努力～放射能モニタリング、健診、記憶の継承

「居住可能」とされた汚染地の住民は、事故後 33 年間ずっと「立入り禁止」の森や廃村と「隣り合わせ」の生活送ってきました。これらの地域では（被災三国のそれぞれで、少しずつ施策は異なるが）、今も政府の政策として食品放射能のモニタリング、住民の体内セシウム検査、定期健康診断、子どもたちの非汚染地での保養が行われています。また、学校では子どもたちが地域の汚染状況を測定実習を通じて学び、被ばくから身を守るための具体的な放射線教育が行われるなど、被ばくを出来る限り避け、健康を守るための努力が続けられています。そして学校や地域では、チェルノブイリ事故の「悲劇」を記憶し、「犠牲者」を追悼し、語り継ぐ、様々な活動が続けられています。

ナローブリアの
病院健診で体内
セシウム測定を
受ける子ども



学校のクラスごとに
病院に来て健診を受
ける。それぞれ自分の
カルテを持っている。

* 経済的発展の遅れる汚染地

汚染地の街や村の多くは、もともと農業や酪農が主な産業だった地域ですが、事故後これらの主要産業が汚染のために制限・禁止される一方で、30 年以上経っても新たな企業の誘致や起業は難しく、地域の経済的発展も遅々として進んでいません。より収入の得られる職を求めて、多くの人々がモスクワなどの大都会に「出稼ぎ」に出ています。

* 甲状腺ガンをはじめとする健康被害～顕在化はこれから

事故当時、小児・思春期だった人々、胎内で被ばくした人々に甲状腺ガンが増加し（ウクライナ、ベラルーシ、ロシアの被災三国で、約 11,000 例の甲状腺ガンが報告されている）すでに様々な調査によって、事故で放出された放射性ヨウ素の被ばくによる甲状腺ガンのリスク増加が明らかにされてきました。事故から 20 年以上経った時点でも、事故当時 18 歳以下だった人々の間での甲状腺ガン増加傾向は続いていると報告されています。汚染地住民の乳がん、白血病の増加、事故処理作業員のがん・白血病、循環器疾患、白内障の増加なども報告されています。被ばくによる様々な健康被害が、より顕在化し、専門家の調査・研究によって「有意なリスク」として国際的にも認められるようになるのはこれからです。（詳細は下記「ジュラーヴリ」113 号 P17 を参照して下さい。） <http://wakasa-net.sakura.ne.jp/che/113.pdf>

* 今後 100 年にわたる放射能の厳重管理が必要なチェルノブイリ 4 号炉

事故を起こしたチェルノブイリ原発 4 号炉は、事故直後に数ヶ月間の突貫工事で、残った核燃料（残量の推定には不確かさがあるが、事故時に炉内にあった放射性物質[ウラン]の 60% 余、あるいは 95% とも推定されている）の放出を防ぐために「石棺」と呼ばれるコンクリートの覆いが建設されました。「石棺」は、破損した 4 号炉の建屋の一部を支えにした「応急的」建造物です。年月の経過とともに風雨に曝され、内部からの放射線照射も受けて劣化が進んでいました。経済困難を抱えるウクライナだけでは対処できず、放射性物質の環境への再放出を懸念した欧州の国々によって「チェルノブイリ廃炉基金」がつくられ、2010 年から総工費 21 億 5 千万ユーロをかけて新たなアーチ型の鋼鉄の巨大シェルター「新安全閉じ込め構造物」[NSC: New Safe Confinement]（アーチ部の幅は内寸 245m・外寸 270m、全長 150m）が国際協力で建設されました。様々な事情で工期が遅れ、2016 年にやっと「石棺」の上を覆うようにアーチをスライディングさせて設置されました。今後 100 年にわたって放射性物質を封じ込める計画とのこと。外国の専門家も含めて約 3000 人が NSC の管理のためにチェルノブイリ原発サイトで働いています。



NSC をスライディングして「石棺」を覆う数ヶ月前。
左の大きなアーチ形の建造物が NSC。
(2016 年 8 月に現地で撮影)

フクシマ事故 8 年の体験と想いを聞く～事故の「風化」を許さず、これからも共に歩む

事故から 8 年を迎えたフクシマでは、難航する廃炉作業、続く放射能汚染、除染廃棄物の処理・保管、賠償・支援の打ち切り、生活再建、健康管理・医療保障、等々、課題が山積しています。それにもかかわらず、政府は「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」（2017 年 12 月）の下、来年 2020 年の東京オリンピック開催に向け、フクシマ事故被害などまるで「なかったこと」のようにしようとしています。このような政策の下で、フクシマの被災地では、放射能汚染や被ばく被害に対して不安を抱いている多くの人々が声を出せない雰囲気がますます広がっています。

政府は、低線量被ばくの健康リスクを一切認めず、日本の放射線防護の法律でも定められている「公衆の被ばく限度、年1mSv」をフクシマの被災地では守ろうとせず、人々が被ばくを避けて健康を守る権利を蹂躪しています。そして旧避難区域では、「年20mSv基準」での「帰還促進策」を進めていますが、実際には戻る住民は少なく（表参照）、そのほとんどが高齢者です。医療・介護をはじめ、高齢者の日常生活に必要なインフラ整備は一向に進まない一方で、「イノベーション・コースト計画」など、被害者に寄り添わない「復興」計画が推し進められようとしています。

フクシマ事故の被害者の体験は、それぞれの地域、家庭、年齢、性別、等々、また被災状況によって様々です。国が責任を持って被害者を守る施策を行なわない中で、個々の被害者は、限られた情報を頼りに「自己責任」でその時々自分たちの暮らし方を選択せざるをえませんでした。避難指示の出なかった地域では、多くの人々（最大時、推計15万人を超える）が「自主避難」しました。一方、大多数の人々は様々な事情でフクシマに住み続ける選択をし、被ばくや将来への不安を抱えながらも暮らし続けてきました。そんな中で、子どもたちを守るために放射能について一から学び、少しでも被ばくリスクを減らしたいと、全国の人々とも繋がりながら、様々な活動してきた人々がいます。今日の「集い」では、そんなお母さんのひとりである野口時子さん、そして娘さんの佑芽さんをお招きしました。フクシマ事故8年の体験と想いをお聞きし、共有し、これからも共に何ができるか皆で考える機会にしたいと思います

└

旧・現、避難指示区域（及び旧緊急時避難準備区域）を含む市町村の最近の居住者・避難者数口

	広野	楢葉	富岡	川内	大熊	双葉	浪江	葛尾	南相馬	飯館	田村	川俣
2011.3.11 の住民登録数	5,490	8,011	15,960	3,038	11,505	7,140	21,434	1,567	71,561	6,509	41,662	15,877
時点	2019.3.31	2019.3.31	2019.3.31	2018.9.1	2019.3.31	2019.3.31	2019.3.31	2019.4.1	2019.4.1	2019.4.1	2019.3.31	2019.4.1
上記時点の 住民登録数	4,735	6,908	12,913	2,739 (2016.10.1)	10,341	5,980	17,434	1,408	53,811 小高 7,785 原町・旧避難 738	5,619	36,435 旧避難/避難区域 3,535	13,158 山木屋地区 812
居住	人数	4,117	3,678	791	2,165	917	966	婦村者 318 転入者 83	小高 3,493 原町・旧避難 538	1,258 うち転入 101	上記区域のうち 3,237	上記区域のうち 368
	世帯数	2,078	1,843	552			633			620 うち転入 46	同上 1,193	同上 159
	帰還率(%)	86.9	53.2	6.1			5.5		旧避難区域 47.3	(22.4)	同上 91.6	(45.3)
避難	人数			県内 9,714 県外 2,617	県内 377 県外 135	県内 7,850 他、県外	県内 4,080 県外 2,799	県内 14,231 県外 6,218	県内 936 県外 71		県外 258 県内 4,100	同上 298
	世帯数			県内 4,733 県外 1,358		全体 3,793					県外 138 県内 1,556	同上 94

*福島県ホームページ、及び各市町村へのリンクより作成。

*時点が違うのは町村の調査発表時期の違いによる。

*双葉町の避難者は震災以降の転出入者、出生者を含む、町として支援対象者となる人口を記載。

*浪江町の避難者数は、「町民数」と一致しない。

（注）「3a!郡山」の事務所を訪問して野口さんたちと交流したバーラさんとバーリャさん。

チェルノブイリとフクシマを結ぶ

～事故被害者の人権と補償を求め、核被害を繰返させないために

「繰返さないで！チェルノブイリ」を合言葉に活動を続けて来た私たちは、フクシマ事故が起こる前に原発を止められなかった悔しさと悲しさ、その反省の上に、チェルノブイリとフクシマを結び、「チェルノブイリ支援・交流の経験をフクシマに活かそう」「チェルノブイリとフクシマの被害者の交流も進めよう」と、この8年間取り組んできました。

2012年4月に、チェルノブイリ被災地からフクシマに来て頂いたクラスノポリエの小児科医バーラさん、チェリコフの元教員バーリャさんと一緒に、「3a!郡山」の事務所で野口時子さんらと交流したのが、野口さんと私たちの出会いでした。「子どもたちの健康を心配するお母さんたちの必死の思いが、痛いほどよくわかりました。私たちも事故後、同



2012年4月、「3a!郡山」の事務所を訪問して野口さんたちと交流したバーラさんとバーリャさん。

じような思いをしながら子どもたちを育ててきました。」と、ベーラさんは交流会の感想を述べられていました。

その後も、ベラルーシの「移住者の会」のジャンナさん（2016年3月）、ロシアの汚染地ノボジプロフのNGO「ラディミチ」のカーチャさん（2016年8月）とともに、「3a! 郡山」の事務所を訪問してお母さんたちと交流しました。「ラディミチ」からは、元代表のパーベルさん（2016年4月）、ノボ・キャンプの責任者だったアントンさん（2013,15年）とも一緒に（「3a! 郡山」には行けませんでした）浜通、飯舘村、福島市、二本松市を訪問し、また避難者の方々と交流しました。昨年秋には、今度はフクシマの方々と共にチェルノブイリ被災地を訪問し、更に交流を深めました。

チェルノブイリとフクシマを結ぶ交流の中で、共通の課題も見えてきました。原発重大事故が被害者の生活全体を変えてしまうこと、事故の「風化」を許さず、これ以上の原発事故と核被害を繰返させてはならないこと、そのためにも原発を推進してきた加害者の責任を問い、原発を止めていかなければならないことを確認してきました。また、被ばくを避け、人々の健康と生活を守る、とりわけ子どもたちの健康を守るための具体的な施策-食品放射能や空間線量のモニタリング、放射線（防護）教育、健康診断、保養、等々-を国の責任で行わせることの重要性、「公衆の被ばく限度、年1mSv」以上の被ばくを避けることを政策の基本とし、健康権・生存権など被害者の権利を保障させることの重要性も確認してきました。そして、核被害者の人権と補償の確立を求め、これ以上の核被害を繰返さないために連帯し、核の軍事利用も「平和利用」の原発もなくしていこうという思いを共にしてきました。

今後の私たちの取り組みを考える～昨年に引き続き…

* チェルノブイリとフクシマを結んで、学び、伝え、交流を深めましょう

- ・ 「チェルノブイリ」を改めて学び、「フクシマ後」の日本に伝え活かす：被害の実態、被害者の権利を求める運動や「チェルノブイリ法」をはじめとする施策とその実状。
- ・ チェルノブイリとフクシマのヒバクシャと私たちとの、そしてヒバクシャどうしの交流・連帯も、さらに進めたい：「チェルノブイリ35年、フクシマ10年」を見据えて、「チェルノブイリ30年、フクシマ5年」からの前進をめざす。（来年早々に、フクシマの「若者」とともにチェルノブイリ被災地訪問を相談中。）

* フクシマの実状を知り、学び、伝え、ともに課題に取り組みましょう～「顔の見える」交流を

- ・ 「保養」グループへの支援と協力
- ・ フクシマ訪問、フクシマからの関西へ被害者の方の招聘

* フクシマ事故被害者の健康とくらしを守るために

～被害者、全国の皆さんとともに、対政府交渉などにも引き続き取り組みましょう

- ・ 「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」批判：復興庁冊子「放射線のホント」（2018年3月）の撤回署名、「放射線副読本」撤回署名にも取り組む
- ・ 無料の健診、医療、健康保障（国による権利を伴う、法的根拠のある「健康手帳」の交付等）は、全ての被害者にとって「生活再建」の大前提、被ばくを強いられた被害者の当然の権利等々

* ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者の運動とその成果をフクシマで活かしましょう

国家補償に基づく「被爆者援護法」を求め、闘われてきた長年にわたる被爆者運動、等…

私たち自身が学び、フクシマに即して考え、伝え、広げ、話し合い、具体的な運動につなげる

* 事故を繰返さないために、原発再稼働反対、脱原発にも取り組みましょう

対談：母娘で語る、フクシマ事故 8 年の体験と想い

野口時子さん

野口佑芽さん

事務局：振津

《8 年経った福島》

振津：8 年経った福島はご存じの通り、多くの問題を抱えています。人々は、事故直後からいろんな思いをし、限られた情報の中で、いわゆる「自己責任」でそれぞれの判断を迫られて過ごしてこられました。最多時で 15 万人の方々が福島から県外に避難したと推定されています。その中で野口さんたちのように一旦は避難したけれど、いろんな事情で戻ってこられた方、もともと避難しなかった方、100 人に聞けば 100 とおりの被災体験と選択があったと言われます。

その中で共通すること、またチェルノブイリにも共通することを互いに学び合って、被害を受けた人々の健康と生活、権利を守る活動に取り組んでいきたいと思います。

本日は対談形式でお二人の想いと体験をお聞きし、皆さんと共有したいと思います。そして会場の皆さんのご意見もいただき、今後の活動に活かしていきたいと思います

《野口さん母娘紹介》

振津：改めてご紹介します。顔見知りの方もおられるかと思いますが、野口時子さんと佑芽さんです。

時子：こんにちは。福島県郡山市から来ました野口時子です。震災があった時もその前も郡山に住んでいます

佑芽：今は岐阜工業高等専門学校に通っている野口佑芽です。小学校卒業の直前に震災に遭いました。



《出会い》

振津：2012 年、事故の翌年の春に、私たちは、チェルノブイリ被害者の経験を福島のお母さんたち直接に聞いてもらいたいと、チェルノブイリ被災地から小児科医ベーラさん・元教員バーリャさんに日本に来てもらいました。その時に「3a！郡山」という野口さんたちが主催していたお母さんたちのグループをお尋ねしたのが野口さんとの出会いの始まりです。あの時の交流会では、野口さんや皆さんは「神妙な顔」をして、子どもたちを放射能から守りたいと、本当に必死な表情をされていました。

ベーラさんたちは、お母さんたちがピリピリして、不安でどうしようもない雰囲気を感じ取って、できるだけ安心させようと話をされていたようでした。後で、「福島のお母さんたちの心配が我が事のようによく分かる、自分たちも事故後に同じような思いをしたから」と言われていました。

《事故前のこと・・・福島に原発があることを知らなかった》

時子：私は、元々は岩手県出身ですが、岩手県には原発はありません。夫は千葉県出身ですが、転勤族で、たまたま転勤して住んだ福島県の郡山市に落ち着きました。

福島に住んで20年。でも住んでいても、福島に原発があることは知りませんでした。

大地震発生の翌日3月12日のテレビで、ズーッと定点カメラで原発が写っていて、「これはどこなんだろう」と思っていたら、それが福島だったんです。「浜通りの福島原発です」と聞いて、初めて福島に原発があることを認識したんです。それまでは、夜7時の天気予報が東京電力の提供で、なんで福島県なのに東京電力なのかな？変だな…くらいには思っていました。東電の原発が福島にあるということが前提だったんだなと、後になって分かりました。

振津：中通は原発から離れているので、野口さんのように原発のことを知らずに暮らしていた方々もけっこうおられますね。佑芽ちゃんはどうでした？

佑芽：私も知らなかった。原発が何かも知りませんでした。

《3月11日》

振津：3月11日の後、避難に至るまでを、ちょっと順を追ってお話ししていただけますか。

時子：3月11日は揺れが本当にひどくて。その日はちょうど中学校の卒業式だったんですが、その中校が避難所でした。私たちは9階建てのマンションの6階に住んでいました。この娘もまだ5年生だったのですが、余震もすごくて、リビングがメチャメチャで子どもたちに見せることもできないほどひどかった。自分の心の整理もつかず、今日は、揺れもひどいので避難所に行こうということで、避難所になった中学校で一晩過ごしました。卒業式だったので花いっぱいすごくきれいな避難所で（笑）。でも寒くて、寒くて。なぜか雪が降ったんです。真っ暗になって、そして雪が降りました。

単身赴任の夫は宇都宮にいて、高速道路が使えないので、10時間かかって帰ってきて合流し、家族4人で避難所で一晩過ごしました。

3月12日、朝から子供たちを避難所に置いたままマンションに帰り、テレビは無事だったので情報源としてテレビをつけながら片付けていたんです。その時に原発を定点カメラでジーッと写していて、1回目の爆発が12時過ぎだったかな？しかし、私は見ていなくて。原発があるのも知らない私ですから何が不安かも分からず、窓も開け放って片付けだけして、その夜からマンションに戻って家族で過ごしました。

《避難は夫が決めた》

時子：3月15日。その頃、夫の当面の仕事は、部下を地元に戻すこと、例えば青森の人は青森、広島の場合は広島へ戻す。それが済むと仕事がなく、というか仕事ができる状況ではなかったもので、インターネットで情報を見ながら時間を過ごしていたようです。そして、お昼前に夫から電話がかかってきて、「今から避難するから準備して」と言われて、その時は、「ああ避難ね、3日位の準備かな。はい、分かりました。」と返事をする、「いつ戻れるかわからないから、とりあえず持てるものは持って、車に積める準備をしておいて」と言われました。その時は、たまたま新潟に友人がいたので、一晩泊めてもらうように連絡し、昼頃、バタバタとマンションを出ました。その時に持って出たのが4月から小学校に入学する息子の真新しいランドセルと、毎年撮っている家族写真の

アルバムと。本当に着の身着のままで、実家が岩手だったので、実家に帰れば何とかなるだろうという思いもありました。一晚二晩、車で過ごさなければならなかったと思ったので、毛布も1枚持ちました。昼過ぎに郡山の家を出た時、雨から雪に変わって。それが、あの、いわゆる放射能プルームだったのかと思います。

振津：そうですね。2号炉が爆発して、あの汚染地図を描くことになる、放射能を含む雨と雪ですね。

時子：郡山を出る時に、もう戻れないかもしれないと思って、「私たちは避難するので今度いつ会えるか分かりません」というメールを知人一人一人に送って挨拶をしました。その時に返ってきた答えはいろいろあって。「今度いつ会えるか分かりませんがお互い頑張りましょうね」というメールだったり「野口さんは行けるところがあっていいですね」というメールだったり。本当にいろんなとらえ方があって。私たちも本当は行きたくはないけど、「何が起こるか分からないから」という夫の判断で出ることにしました。

《戻るか戻らないか・・・家族会議》

時子：その後、岩手の実家に行って1ヶ月くらい居ました。その時に家族会議というか、これからどうするかということ、娘も交えて3人で話し合いました。息子はダウン症で、それもあつたんですね。転校するにしても、岩手にどんな学校があるのかも分からなくて転校の手続きもしてないし、学校にも行けてなくて。娘はあと1年で卒業で、お友達と一緒に卒業したいということも言われたし。それで、息子の入学式が4月11日だったのでその前日に郡山に戻ってきた。そして、戻ったからには注意して生活しましょう、と約束して。できることなら、娘が中学校に行く時に県外に出ましようか？ というくらいの話はしました。

振津：佑芽ちゃん覚えている？ 揺れた時、お父さんが避難すると言った時のこと。小学校6年生になる春ですよ。

佑芽：揺れた時は驚きしかなくて。びっくりしました。避難所に行って、家に帰ってきても、自分の部屋は、物が散らばっていて歩けなかった。衝撃でした。避難すると言われた時は、突然で、えーと思った。マンションの人と話している時に急に言われて驚いた。



時子：マンションの人と話している、というのは、避難の日、親しいご近所三軒で、「最後の杯」ではないけど、インスタントラーメンを食べてお別れをした時のこと。一つの家族は生まれたばかりの赤ちゃんがいて、「私は大阪に行きます」と決めていた。もう一つの家族は福島県人どうしのご夫婦で、さきほどの「行く所あっていいですね。仕方ないのでここに居るわ」という話だった。

佑芽：出発前のマンションでの会話はあまり覚えてないですが、岩手で、学校をどうしたいかと聞かれた時に、6年になるし、卒業まではみんなといたいと言ったのは覚えています。

振津：お母さんからは、佑芽ちゃんに、郡山でみんなと一緒に卒業したいと言われたことが戻るきっかけの一つになった、ということをお聞きしました。

時子：私たちは転勤族で、たまたま福島にいた時に、自分の子どもが転校生にならないようにと郡山にマンションを買いました。夫には、娘はとても内気に見えたそうで、転校していじめに遭ったりさせたくないと思ったのです。そしてマンションを買って5～6年で被災しました。「避難する・しない」という時に、娘には郡山に残りたいと言う希望があって、本当に悩みました。避難をして、

うまくいくかもしれないが、もし子どもの心が折れたら、それを修復できるか分からないと思いました。体は丈夫でも心が折れてしまうとしょうがない。心配もあるけど彼女の意見も尊重して残りました。残ったからには気をつけて生活しよう。

《郡山に戻って》

〔一番先にやったこと〕

時子：一番先にやったことは、洗濯物は絶対に外に干さない、窓は開放しない。水道水を使わない、水を買う。あと、地元の野菜も買わない。スーパーに行っても野菜売り場を見ることはなくなりました。魚も当時はちょっと不安だったので買わずに肉中心。下の息子は肉が好きなので喜んでました（笑）が。

〔3a 立ち上げの思い〕

振津：戻って来られて、その後、「3a！郡山を立ち上げて活動されたわけですが、「3a」って、何ですか？ 初めて聞いた時は、なんで a が 3 つの？って分からなかったんですけど。

どういう思いで「3a！郡山」を立ち上げたのか、話してもらえますか。

時子：最初は「安心・安全を求めて行動する会」というのを、2011 年 6 月に、母親たち 6 人で立ち上げました。安心の a、安全の a に行動でアクションの a をいれて 3a になりました。

自分の子供を守りたいと、全てありとあらゆることを注意して生活するという思いのお母さんたちが本当にいっぱいいました。

小学校の場合は、先生たちが一生懸命、子どもたちを守ってくれて、登校する時は帽子・長袖・マスクをするようにと言ってくれたり、外で遊ばせないし、外で体育もしないし、暑くても教室の窓は開けない。その時は教室で扇風機を 4 台位回して、それでも暑くて鼻血が出る子もいたけど。そういうわけで、小学校に通わせていた私は、言われたことは守ろうと思い、それほど不安はありませんでした。しかし、「3a」で活動している中学生・高校生のお母さんたちの話を聞くと、授業では外で体育はしないし、そういう指導もあるけど、放課後の部活動は今まで通り。体育館はいろんなクラブがあっという間で使えないし、グラウンドは除染されていない一般道をロードワークと称して走らされている。体育はダメだし、学校でもダメだと言っているのに、なんで部活は別なのか？ 分からない。お母さんたちは不安だと言っていました。高校にいたっては何の指導もない。震災前と全く同じようにミニスカートはいて、自転車で通学していた。「普通の生活」に戻っていて、すごく不安だというのが「3a」を始めるきっかけでした。

〔6 月 3a を立ち上げて〕

振津：（郡山市に）戻って来たのが 4 月、お母さんたちの会の立ち上げが 6 月。2 か月の間にこれまで何の活動経験もない野口さんたちが「3a」のもとになるグループを立ちあげたんですね。「3a」がどういう活動をされていたのか紹介して下さい。

時子：

- ① その当時は県民健康調査が始まる頃でした。県民健康調査は実は小児甲状腺がんだけが（チェルノブイリでも）放射能の健康被害として認められたとして、「ヨウ素による甲状腺被ばくの危険があるので、県民の皆さんが心配されているから県民健康調査をします」ということで始まりました。対象は、当時お母さんのお腹の中にいた子どもから 18 歳までの子どもとい

う限定されたものでした。おまけに検査と言っても甲状腺のある首の所を「超音波で撫でるだけ」の検査のみでした。それだけでは不安がぬぐえない、どうなっているのか分からない、ということで、血液検査をすべきではないか？ ということで振津先生に御指導いただいたり、近くにいる先生にも聞いたりして、「3a」では血液検査を含む甲状腺の健康診断の費用補助を始めました。集まった寄付をもとに、お子さん1人18000円かかるところを、3000円の自己負担で、「3a」で15000円を出すことを始めました。これには希望者が殺到しました。1年に1回ということで3年間やりました。

- ② 次の年には、子どもを守るために通学路を除染するのを手伝いました。除染するのだから自分の体も不安だし、子どもを守るためには子どもより先に死ねないし、自分の体を守るためには検査をしたいという親たちの声もいっぱい集まった。それで、お父さんもお母さんも是非健診をしてくださいと希望者がある限り支援しました。ちなみに2~3日前に「3a」のメールに、親子で健診を受けたいがまだ補助をやっていますかとメールが届いたんですけども、残念ながら今はやっていません。
- ③ 振津先生の無料健康相談会を月一回やりました。放射能のことだけではなく、いろんな相談、子育てのことや何でも対応してもらいました。
- ④ お野菜マルシェは、富士山より西の野菜を手に入れたいというお母さんたちの希望に添いました。奈良の農民連さんにご縁をいただき、毎週火曜日に奈良県からいろんな野菜を仕入れて、収益なしで販売しました。2011年の10月位に始めたかなあ。まだ事務所も構えてなくて、自分のマンションの駐車場で（野菜を）広げました。
- ⑤ 2011年12月には、放射能測定器をカタログハウスさんから借り受けました。市民放射能測定所として選んでもらい、300万円位する器械を使って無料測定室をやりました。
- ⑥ それから、保養情報。保養って分かりますか？ 保養の案内や紹介、情報提供をしました。子どもさんをできるだけ被災地の被ばくから遠ざけようと、一定の期間、別の場所で過ごすためです。「3a」では（保養は）やってないけど、全国の保養のお知らせとかをしました。
- ⑦ 無料法律相談会というのを月1回やっていまして、東京から弁護士さんに来ていただいて震災や原発事故の賠償などに関する法律相談です。これは今でも続けています

《子どもたちの生活》

振津：5年生の佑芽ちゃんと新1年生の倫太郎君の学年では、避難のために引越しをした友達の割合が違っていたと聞きましたが、どうでしたか？

佑芽：私のクラスは2クラスだったんですけど、どっちのクラスも避難した人は多分2人ずつくらいとかで少なくて。

時子：倫太郎のクラスは、入学式の時は60人くらいの予定の児童が約50人で始まった。5月の連休が終わるとまた10人くらい減って、夏休みは終わると又減って、1クラス15人くらいになった。本当に少ない人数で1年間ほどはそうでした。でも、倫太郎が卒業するときは、戻ってきて30人くらいになったかな。

振津：お母さんが活動を初めて、佑芽ちゃんとしては、どう思っていましたか？ 今回初めて聞く話ですが、この際なので(笑)。

また、お母さんが、外遊びを注意したり、マスクをしなさいとか、いろいろ気をつけなさいとか、言って、今まで普通にやっていたことができなくなるとかありましたか。

佑芽：んー。お母さんは、いろいろすごいことやってるなーと。忙しそうにしているすごいなーと

思いました。私は、もともとあまり外で遊ぶタイプではないので、家の中でも平気でした。みんなに言われて、体によくないこともだんだん理解できたし。でも、夏になってくるにつれて、長袖やマスクで登校するなんて暑くて無理だし、嫌だと思いました。

《郡山市議会への請願》

振津：お手元の資料をご覧ください。野口さんが「3a」で活動していた時、その都度、郡山市議会に提出した請願書です。当時どのようなことが課題になっていたかがよくわかります。説明してもらえますか？

時子：これは請願書なんですが、これも活動をするようになって初めて知りました。一番最初に出したのが、2011 年の 8 月。「要望書」という形で、市長宛に出したのですが、無視されて、「これって効き目がないんだ」と思って。それ以後は、議会毎に議会宛の「請願書」という形にしました。

〔市民が受ける食品による内部被ばくの最小化を求める請願（2011.9）〕

時子：初めての請願は 2011 年 9 月です。学校給食は、震災以前は地産地消で地元で作ったお米に地元の野菜。しかも郡山って鯉料理が郷土料理なんです。どこのお米か分からないので、給食に使う前にちゃんと測定してください、だから放射能測定器を設置してくださいということを請願しました。これは問題なく通りました。冬休み前には全部の学校に測定器が入ったと思います。

二番目の請願は郡山市独自の測定基準を作ってほしいということで、会員の皆さんと相談して決めました。震災後、国は食品の基準値を急に上げたんですね。

振津：事故前は、一般の食品の「放射能基準」はなかったですね。チェルノブイリ事故後に輸入食品の放射性セシウムが 370（ベクレル／kg）という基準が作られましたが。震災後に設定された国の基準は暫定基準で、今の値よりも非常に高い基準値でしたね。

時子：それでは子どもを守り切れないと、厳しい基準を求めたのですが、これは認められなかった。

次は食品放射能測定でした。公民館毎に測定器が置かれたので、そこに持ち込まれた食物や農協さんに出すお米も全部測定値を公表するようにということですが、これは通りました。

「市民放射能測定所の設置」については、「勝手にやればいい」ということでした。何か補助をという意味で請願したのですが実現できませんでした。

農地の除染については、「3a」を立ち上げた時に農家の青年が加わってきて、農家の人はなかなか声を上げる人がいないと言われますが、若い方で、将来が不安なので一緒にやらせてくれと言われて一緒にやることになりました。農家もこれからだということで、専門家を招いて行う農地除染の学習会への支援を求めたのですが、決まってはいませんね。

振津：全部説明してもらいたいのですが時間もないので幾つかだけ紹介してもらいましたが。こういう形で、毎日心配していることを要請書にして行政に出す。その中でちゃんと実現されたこともあるし、声を出さないと通らない。安心・安全は国も言うけどアクションは無しです。アクションする中でそれを実現させていく、そういう被災地での活動があったから、一步步、子どもたちを守るいろんな施策が進んでいったんだなと感じます。



〔小学校そして中学校へのエアコン設置を求める請願（2012.6）〕

時子：公立の小・中学校の各教室にエアコンの設置を誓願しました。というのも、窓を開けられないので、本当に熱風の中の非常に劣悪な環境で、先生たちも大変、子どもたちも「ゆでだこ」のような環境で授業をしていました。実は、全校へのエアコン設置は、いち早く隣の二本松の市長さんがやっていたので郡山も負けていられないと。専門委員会を傍聴しに行きました。まさか、反対意見が出ると思わず傍聴していたのですが、出ました。「（2011 年 6 月で）世の中では節電・節電と言っている時に、福島で電気を使うのはどうなんだろうか？」「子どもたちに我慢を教えるのが教育だ」と言って。えっと思って聞いていると、「市役所とか涼しいではありませんか」という意見を言ってくれた議員もいました。そうすると、「市役所はお年を召された人もほっとされたりする公共の場所なので、市役所にはエアコンは必要」という反論（苦笑）。「とにかくまだ必要ない」と反対意見が多くて否決されました。びっくりしました。1年後に、同じ内容の請願が出ました。某女性経営者団体が「熱中症対策」ということで同じような誓願を出すと「これはかわいそうだ」とすぐに通りました。この時も傍聴に行きましたが、「この誓願には放射能という言葉がないからいいんじゃないの」という委員の声が聞こえました。



振津：2012 年、すでに 1 年目くらいで、「復興・復興、大丈夫・大丈夫」という政府やマスコミの大々的な宣伝が始まりましたよね。そのキャンペーンが強くなっていく中で、お母さんたちは、「3a」に来たら言いたいことが言えるけど、ママ友で話をしている時は、この人は放射能のことを話していい人かどうか…と考えて話すようになっていましたね。佑芽ちゃん、学校ではどうでしたか？

佑芽：小学校の時は、保養に行く子が多かったし、「マスクして」とかみんな言っていたので、放射能のことも普通に話したけど、でも、中学校では、人数も増えて、話した記憶があまりなく、話しの流れで話すことはあっても話題にすることはあまりなかったかな。

《お母さん達の不安・心配事を聞く》

振津：そういう中で、お母さんたちがいろんな悩みをもって「3a」に集まってきたのですよね。健康相談でも、健康の相談もあったけど、精神面のストレスというか、家で夫と意見が合わないとかの聞き役の場面も多かったように思います。

時子さん、どうでしょう？

時子：最初に「3a」で座談会を開いた時に、2011 年 7 月だったかな、平日の昼間（午後）の時間に企画したのですが、70 人ほど集まりました。働いているお父さん・お母さんは来れないので、孫を持つおじいちゃんやおばあちゃん、生まれたばかりの赤ちゃんを持っている人が多かった。みんなどうしていいのか聞きたかったのです。

いろんな悩みがありました。まずは、食べ物のこと。洗濯物のこと。野菜を買いに来るお母さんの一人は、実は農家の方で、「出荷はするが、自分は食べない」と話していました。それを聞いて、ますます地元の農産物は買えないなと。それから、「3a」の西日本の野菜を隠れて買いに来る方。夫の実家から米を送ってもらうけど、夫から怒られるので食べないわけにはいかないから、「3a」のお米と混ぜて薄めるといふか、産地を薄めて、気持ちも薄めるといふ方もいました。また、今日は夫がいるから、お話ししたいけど、買い物だけして帰ります、とか。毎日来るお母さんで、スタ

ップのように動いてくれている方が、ある日、「明日からは来れません」と言われた。どうしたの？と聞くと、夫が市役所の職員さんで、それでも女の子が3人いるから今までは許してくれていた。でも、「おまえはまた、あのアジト（笑）に行くのか」と毎日のように言われて耐えられないので、これからは、自分で何とかします、と。だから、その人のことはどうしているかなー、とすごく思います。家庭の中で同じ方向を向いていればいいのですが、反対の方向を向いている時、保養に出したくても隣は行ってないのに何で保養に出すんだ、とか、周りとは比べられたり。毎日のことで、そういうところがやりきれずに、暮らしていて。お母さんたちが「3a」で話して、気持ちが落ち着くならそれでもいいかなと思いました。

振津: ベラルーシなどチェルノブイリ被災地では、国が放射能のリスクを認めて測定をしましょう、あるいは保養に出しましょうという環境があるので、みんなで話し合えるけど、日本の場合、国は「大丈夫・大丈夫、なんで気にするのか」というので、地域の中でも家族の中でも相談できない。ちゃんとリスクを認めて責任をとるべき国が責任と放射能のリスクを認めないから皆さんがこれだけ悩んでいる。そういうことかなと思います。

《再度、議会請願について》

〔子ども被災者支援法の基本方針の早期実施を求める意見の提出（2012.2）〕

振津: もう少し、要請書に戻って見てみたいと思います。

「子ども被災者支援法」のことですね。これができた時は、これで、少しは状況が改善できるかとみんな期待をして要請書を出されたと思うんですけども。全天候型屋内運動場の要求が書かれていますが、これは？

時子: これは通らなかったのですが。ただ、屋外プールだったのが屋内プールになって、これはよかったかなと思います。

振津: 「子ども被災者支援法」は2012年にできたけど、枠組みだけで中身はなくて。すでに行われていた対策を並べただけのような「基本方針」がずいぶん後になって出されました。この「基本方針」が出る前に、「早く方針を出して具体的な施策を行え」という要請ですね。

〔19歳以上の甲状腺に関わる医療費無料化（1014.6）〕

振津: 「19歳以上の甲状腺医療の無料化」を求める要請書もありましたね。

この課題は全国で取り組まれましたけど、県民健康調査で甲状腺癌と診断された人は、今では200人を超えています。福島では18歳までは、震災後、医療費が「子育て支援」ということで、原発事故とは関係なく子育てを支援するということで無料になりました。しかし19歳になると有料になるということで19歳以上の甲状腺にかかわる医療の無料化を求めたんですね。

時子: はい、県民健康調査は環境省がやっているのです。お金の出所は環境省で厚労省ではない。診断された後は厚労省の管轄の医療になるのです。

振津: 二次検査までは「調査」なので環境省。3ヶ月毎の超音波検査が必要とか、確定診断がされた後の手術とかは、調査と関係がないので保険診療扱いで厚労省の管轄。18歳までは「子育て支援」ということで無料ですが、実際、私の知っている患者さんでも診断された時はすでに19歳を超えていたということで、手術や治療は高額療養費を使っても月に8万円以上かかり、家計に響いて非常に苦しい思いをされています。そういうことも含めて、全国で支援して10万人を超える署名を集めて国と県と交渉した。これについては、このような運動の結果、19歳以上になって保険診療が必要になった時は、国が出資した県の予算で、本人や家族が申請すれば医療費が無料になる

という制度ができました。ある意味、これは原発事故後の病気に対する初めてで今のところ唯一の公的支援で、運動で勝ち取ったものです。全国の皆さんと野口さんたちのように福島の子どもの声を集めて求めたことが力となって国や県を動かしたのだなと思って拝見しました。

〔除染目標数値の引き上げに反対する請願（2014.6）〕

振津：最後に除染についての要求ですが、空間線量が毎時 $0.23 \mu\text{Sv}$ だと年間 1mSv を上回らないと国は計算しているんです。郡山でその除染の目標値を上げるということがあったのですか。

時子：環境省の偉い人が来て、福島と郡山と伊達の市長さんたちが会談をした時に、「除染の目標値を毎時 $0.4\sim0.6 \mu\text{Sv}$ に引き上げることが決まりましたよ」という報道があったんですよ。それで、「それは困ります」とこの請願を出したんです。毎時 $0.23 \mu\text{Sv}$ の基準を守ってくださいと求めました。市長は「俺はそんなこと言ってない」という答えだったので、引き上げはこの通りにはならなくて、今までどおり 0.23 で、 0.24 になれば除染するという形は今でも変わっていません。

振津：やっぱりそういうことを一つ一つ積み上げて形にして声を出していくことが非常に重要だったと思います。

《現状》

振津：そういう活動の中で 5 年目くらいになるとだんだん雰囲気が変わり、「3a」に集まる人も少なくなるということがありましたね。その様な中で野口さんとしては、現状を含めてどう見てらっしゃいますか。

時子：我が家の場合は、子どもたちも大きくなり、息子も中学 3 年で、今度高等部に入るんですけども。子どもつながりの親のつながりは、だんだん親も年取ってなくなってきました。そうすると若いお母さんの気持ちが分からない。つながりがとれなくなったんですね。今の幼稚園ですと、震災後にお母さんになった人が多くて、気にしてはいるんだろうけど相談にも来ないし、大丈夫とは思わないだろうけど、どうしているんだろうかと思っていたんです。つい先日、子どもを保養に出したお母さんたちの集まりがあって、たまたま私も出ていたんですが、ああ、いまでも被ばくを心配しているお母さんがいるんだなあと思えました。

私は「3a」を解散したからといって、この問題が解決したとは絶対思っていないで、娘が親になるまで、孫の顔を見て、それで「3a」の活動が終わったなあと言えんと思っていますので、この問題は長く続くことだと考えています。新たに、今まで全然気にしていなかった人が、郡山・福島の地で母親になった時に、8 年前の私たちと同じ悩みを抱えた人たちがやっぱりいるんだなあ、もういないんだろうなと半分以上は思っていたのですが、そういう人はいて当然だし、でも、「3a」もないし、大きい声で話すには、誰が聞いているか分からないし、隣でどういう人がいるか分からないので公の場所で話せない。本当にドンドンそういう言いあえる場所が無くなって可哀そうだなあ。なにか手助けができればとは思いますが。子どもが大きくなってしまっ、忘れてかけて・・・。いや忘れてはいるわけではないが、何か力にならなければいけないと、つい先ほど反省したばかりです。

振津：こんなにバイタリティーのある時子さんなので、これをきっかけになにか違う形で一緒に活動できればと思います。「3a」では本当に頑張りすぎるほど頑張っておられたと思いますね。最後は、一人で毎日事務所にいても、誰も来ない日もありましたね。でもやはり心配している人はいるし、線量は下がってもまだホットスポットもあるし。

チェルノブイリも 30 年経っても、いろんな対策をやっていて、これで終わりにはならないと私

たちも思っています。ましてや、政府はオリンピック目指して、フクシマ事故はなかったかのよう
に、「復興支援」、「リスクコミュニケーション戦略」とか言って、「今あるのは放射能ではなく、風
評被害だけ。皆さん放射能に対して『正しい認識』を持ちましょう」という宣伝を国の政策として
進めています。パンフレットを作ったり、副読本を改定して間違った放射線教育をしようとしてい
る。また人々が線量を気にしないようにモニタリングポスト撤去するという話も出てきていますね。

《リスクコミュニケーションとモニタリングポスト・「復興」》

時子：国はモニタリングポストがあるから危険をあおるという言い方をしています。無いときっと
忘れるでしょうという主張していると思うんですけど、あるから気をつけるし、あるから安心する
というのもあると思います。モニタリングポストを無くして震災前の福島にみかけだけ戻して、震
災前より賑やかにしたいという動きがあります。オリンピックもなぜか、福島で野球とソフトボ
ールをします。それから、Jビレッジは、事故後は東電の廃炉作業の人達が使っていて、Jビレッジ
の芝生の上に宿舎を立てていたんですが、宿舎を取り払って芝生を綺麗に張り替えて、各国の人の
サッカー練習用に使ってもらおうというのがあって。震災前に戻すというか震災前以上に何か・・・
必死で経済活動をしている感じ。本当はちょっと違うのに、と。多分、私ばかりではなくて大半の
人はそう思っているんじゃないかと思います。

振津：そうですね。

浜通りの旧避難区域の自宅に戻った人たちにも、行政はハコモノばかり作って、肝心の病院や介
護施設はスタッフが足らなくて半分閉鎖というような状況もありますし。よく安倍首相は「寄り添
って」とか口先だけで言いますが、私たちは本当の意味で被害を受けた人たちに寄り添って、被害
を受けたご本人たちと一緒に問題に立ち向かっていく、それは100年単位で考えなければいけない
問題だということを改めて考えなければと思います。

今後の取り組みについてはまた改めて議論したいと思います。

《佑芽さんのフランス留学》

振津：近況はどうですか？ 今の学校は？ 外から福島を見て思うことはありますか？

高専に入ってからフランス留学にはどういう経緯で行って、どうでしたか？

佑芽：岐阜の高専では、みんなは私が福島から来ていることは知っているので、「地震とか大丈夫」
と聞かれることはあるけど、自分から話すことはあまりないです。

高専は建築学科です。うーん。なぜ建築かというと、階段のある団地で暮らしていて、その次は
マンションだったので、家族の住む家を建てたかったから。

フランスには、高校生留学に応募して、1年間行きました。
ボルドーの近くの小さな村です。ホストファミリーに同じ年
の女の子がいて、ホストシスターになりました。中学では管
弦楽部に所属していてホルンをしていたので、言葉が全く分
からなかったけど、市民楽団にも入れてもらい、音楽で交流
することができました。言葉は半年位すると分かるようにな
って、帰る頃は日常会話に困らなくなりました。

フランスでは、最後の授業で、日本の福島から来たと言うことで、みんなにプレゼンを頼まれたの
で作ってみました。



2011 年の地震・津波と、日本の地理とかをまず説明しました。フランスでは地震は無いので、もし地震があったら何をしなければいけないとか、避難所や防災グッズの準備を説明しました。福島原発事故の被害についても写真を見せて説明しました。フランスの友だちも高校生なので、2011 年のことは少しは聞いていたけど、津波の映像や、爆発した原発の写真を見て驚いていました。地震がどう起こるか、津波の説明もしました。原発で家に帰れない人がいること、町中にモニタリングポストがあることについては、みんな知らないのでびっくりしたと思います。

振津：福島から留学されたということで、フランスの友だちにも知ってほしいという思いがあったのかな？

佑芽：はい、そうですね。震災の年から 4 年目に行ったので、またその時に福島から行ったのは私だけだったので、多分そういう機会はあるだろうなと思ったし、もしそういう機会があればと。

《保養のボランティア活動に参加》

振津：日本に帰ってきてから、去年、関西の「びわこ 123 キャンプ」にボランティアとして参加されたということですが、その時の感想は？

佑芽：すごく楽しかった。子ども達が生き生きして伸び伸びしているのがいいなと思ったし。今までは自分が保養に行くだけだったけど、ボランティアという立場に立って、子どもたちが伸び伸びしているのを見て、これからもああいう場は必要だなと思いました。

振津：ありがとうございました。短い時間の中でいろんなことを言うのは難しいのですが、原発があるということも知らなかった時子さん、有芽ちゃんがこの 8 年間いろんな体験をされてきたことがよくわかりました。福島の問題がまだ終わっていない中で、今、全国で原発を再稼働しようとしている人たちがいる。それについてはどう思いますか。

《家族で原発について話す》

時子：昨日たまたま、原発のことについて娘と話す機会がありました。うちの夫は建設業（空調関係の仕事）なんですけど、震災の時は、いち早く避難すべきだと言ってくれた。3 月 15 日には避難したので、「うちの子どもは初期被ばくをさせてないので大丈夫だ」というへんな自信がある。そんな夫なんですけど、1 年もしないうちに私が「やっぱり原発はダメだよね」みたいな話をしたら、「何がダメだめか分かってんの？」と言う。「原発がないと経済が回らないんだよ」というような言い方をされた。その頃に、福島で一番大きい銀行の頭取さんが「やっぱり福島では原発を再稼働してもらわないと、経済が回らない」みたいなことを言っていた。夫を言い負かすことはできなかった。一生懸命頑張って働いてくれている夫なんで・・・大変だなあと。そういう話を昨日娘とした時に、娘は娘で・・・。

佑芽：私も、昨日話したのでは、こういう事故もあったし、原発はダメだと思っていたが。

お父さんの話も聞いて、私は建築学科にいて、高専を出ると進学か就職かという選択になって、就職する人の中には建築なのでゼネコン系に就職する人もいます。そういうことを考えた時に、原発があった方がいいとは言わないけど、それも一つとして・・・。うーん、完全に無くそうと言ひ



たけど、言い難いというか。難しいなあと、昨日すごく思いました。

《長い課題》

振津：なかなか複雑な心の内を語っていただいたと思いますけど。この問題については、佑芽ちゃんもまだ若いので、これからもいろいろ議論もしていけたらと思います。

一応、対談はこれで終わりにしたいと思います。

時子さんがさっきおっしゃったように、「孫の顔を見るまでは自分の課題は終わらない」と。次の世代を含めた問題ですし、放射能は、チェルノブイリでも分かるように、30年位では終わりにはならないのが現実です。汚染は100年単位の問題ですが、100年経つと地域が変わってしまうので、ある意味元には戻れない、そういうことをもたらすのが原発事故だと思います。そういう中で、今私たちがやらなければならないこと、すでに被ばくをしてしまった人たち、あるいははまだ汚染のある中で暮らしている人たち、そういう人たちと一緒にできること、そして二度と繰り返さないために何ができるかということを今真剣に考えて行動していかないと次の世代に顔向けができない。そのような事態にすでになっています。これ以上、原発は止めにしないととんでもないことになってしまう。そんなことも含めて、休憩を挟み、質疑を入れながら、皆さんと今後のことを考えていきたいと思います。どうもありがとうございました。

野口時子さん・佑芽さん母娘のプロフィール：

2011年3月11日当時、野口時子さんは専業主婦で、小学5年の娘（佑芽さん）、幼稚園年長組の息子、単身赴任中の夫の4人家族で福島県郡山市に暮らしていた。3月15日東京電力福島第一原発2号炉爆発の情報を受け、家族で実家の岩手県に一時避難したが、約一ヶ月後に郡山に戻った。

同年6月、放射能の不安に悩みを抱えた子育て真っ最中のお母さんたち6人で集まり「子どもを守りたい」想いを話し合い、『安全・安心を求めて行動する会』を発足。10月に『3a! 郡山』（3aは「安全・安心・アクション」）を結成し、時子さんはその代表となった。『3a! 郡山』では、安全・安心な生活の確保のために、日本各地や海外の人々とネットワークを築き、多様な分野の関係者の協力や支援を得ながら子どもを守る活動を展開。「お野菜マルシェ」（西日本産を中心に安全・新鮮な産直・有機野菜を販売）、「健康診断の費用補助」「放射能測定」「保養情報の提供」などに取組んできた。

2012年「救援関西」の招聘で来日したベラルーシのチェルノブイリ被災地の小児科医ベーラさん、元教師ヴァーリャさんが福島を訪問した際に『3a! 郡山』でお母さんたちと交流したことが、「救援関西」と野口さんたちとの交流の始まりだった。

2018年1月『3a! 郡山』は「発展的解消」。時子さんは、福島県で初の『福祉型専攻科 カレッジ 郡山』の立ち上げに参加し、現在、将来息子が生活できるような施設の充実を目指しながら、日々試行錯誤、奮闘されている。

佑芽さんは、中学卒業まで郡山市で過ごし、岐阜工業高等専門学校に進学。現在19歳で建築科3年。2015～16年には、AFS(American Field Service)62期生、「みちのく応援奨学生」としてフランスのテヴィエ（アキテーヌ地方ドルドーニュ）の高校に8ヶ月留学。フランスの友人達にもフクシマ事故被災の体験を語った。

星ものがたり ～ダンスコアポシブル&Pカンパニー～

十数年前から“救援関西”を熱烈支援してくださっているバレエの先生小谷ちず子さん率いる“ダンスコアポシブル”と“Pカンパニー”のリサイタルが6月15日芦屋ルナ・ホールで開催されました。鑑賞の機会を逃すまじと、“救援関西”のメンバーは毎年いそいそと出かけます。ロビーで「チェルノブイリ・フクシマ救援バザー」のブースを用意しアナウンスなどのご協力もいただき、文化・活動両面でありがたい催しです。

まず、小さい生徒さん達の演目から始まりました。年令は十分おばあちゃん世代でありながら孫がいない私は、かわいらしい演技に涙腺が緩みそうになりました。続いてアシスタントも務めるお姉さん4人によるからくり人形を模したおもしろい動きの「人形の夢」。ギクシャクした体の動きがユーモラスでいて、どこかペーススが漂います。

次に圧巻の小谷さんのバレエ「生きる」。精神性の高い素晴らしい踊りでした。生きていく過程で悲しみや苦悩が避けられないとしても、強くありたいという思いが静かにほとぼしり出ているように感じられました。この感想は私個人の現在の心境を反映したもので、小谷さんの本来の意図とは違うかもしれません。が、優れた作品は鑑賞者それぞれが感応できる要素を提示します。小谷さんの底光りする動きが、凝固した現在を表現し、表現されることによってやがては浄化されるというプロセスが見えてきそうな・・・支えが得られました。

第2部は「ドン・キホーテ」の名場面のアレンジで、見どころ満載の出し物。小さい生徒さんやそれなりのご年輩（クイーン世代）の生徒の皆さんに適材適所の役柄の振付けをされており、小谷さんの目利きに感心します。生徒さん達の実力と伸びしろを考慮して、練習の場だけでなく舞台での成長をも促す教育力を小谷さんは持っておられます。それゆえか、生徒さん達が「この先生についてゆこう」と心を定めて一生懸命、でも楽しんで演じているのが感じられ、そのパワーの噴出によって見ている方もエネルギーを注入されます。

第3部の「ベガとアルタイル 星ものがたり」は、以前に演じられた「星座物語」の発展版とのこと。生徒さんの成長と構成に応じて演目自体が大きく成長し新しくなった作品は、小谷さんの面目躍如といったところでしょうか。ギリシャ神話をベースに星座のイメージを膨らませたストーリー展開で、旅するベガが多くの星座との出会いを体験し、様々な物語に巡り合い、宇宙の運行の中に永遠を見出してゆく、そんな想像の拡がりを感じました。

クラシカルな振付けの「ドン・キホーテ」も見ごたえがありましたが、「星ものがたり」は生徒さん達の踊りが伸びやかで、美しい流れが心地よかったです。

小谷さんはこのようなりサイタルを年に数回催され、なおかつ「反核フェス」のトラック舞台にまで生徒さん達を連れて来てくださいます。今秋も出演くださること（ご都合が許せば）を期待しています。ぜひ生の舞台を皆さまにも見ていただきたい！ 次の機会のお知らせを希望の方は連絡ください。ご一緒しましょう。（いい作品に出合っ
て元気になるう。田中あ）



ベガ役・財津さん(右)と
北極星役・福原さん

関電に申し入れを行いました

今年も「チェルノブイリの日」にちなんで、4月24日11時から関西電力に申し入れを行いました。今回は、今までの庶務担当ではなく広報課が申し入れを受け取りに出てきました。事前に何回もやり取りをしましたが、相変わらず「申し入れは5人・5分」の壁はそのままです。また初めはチェルノブイリ事故の日である26日の申し入れを予定したのですが、都合がつかないということで仕方なく24日に繰り上げました。

関電・岩根社長は電事連の新会長就任の会見で、「原発の将来の可能性を高める」と相変わらず原発推進の姿勢を表明しています。呆れるばかりです。チェルノブイリ・フクシマの重大事故に真摯に学び、早く脱原発・再生可能エネルギーへ方針転換をするべきなのですが、とにかく、粘り強く頑張らしましょう。

2019年4月24日

「チェルノブイ事故 33 周年」に際しての関西電力への申し入れ

関西電力株式会社取締役社長 岩根 茂樹 様

「事故さえなければ」・・・チェルノブイリとフクシマ、二つの原発重大事故被害者の共通の想いです。事故により、一人一人のそれまでの普通の生活が一変させられてしまいました。

チェルノブイリ原発事故被災地では事故から33年経っても放射能汚染が続き、人々は放射能と隣り合わせの生活を強いられています。その中で、食品の放射能モニタリングや健診、子どもたちへの放射線教育や非汚染地への保養など、被ばくを少しでも低減し、健康を守るための努力が続けられています。そして、子供たち、その次の世代へと事故被害の記憶を受け継いでいくための教育も取り組まれています。また、高濃度の放射能汚染地から移住を余儀なくされた人々は、事故から33年経っても戻ることはできず、今も望郷の念が募ります。「チェルノブイリの黒い傷痕」は消えることなく続いています。

東京電力福島第一原発重大事故から8年目を迎え、政府は来年のオリンピックを「復興オリンピック」と称し、事故による放射能汚染と被害を見えなくし、「終わったもの」にしようとしています。「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」を進め、支援・補償を打ち切り、人々に被ばくを押し付けようとしています。年20mSvの被ばく基準で避難指示を解除し、帰還を促しています。また、大量の被ばく労働の犠牲の上に進められている事故の収束・廃炉作業は、困難を極めています。このような現実の中では、放射能汚染がまだ残っている上に、コミュニティが破壊され、インフラも十分に整備されていない場所には、故郷であってもなかなか戻ることはできません。人格権などの基本的人権が著しく侵害されたままです。

チェルノブイリとフクシマの二つの原発重大事故は、原発はひとたび重大な事故を起こせば、放射能汚染は広範囲・長期にわたり取り返しのつかないこと、そして事故の収束・廃炉作業は困難を極めることを示しています。もうこれ以上重大事故を繰り返してはならないのです。

貴社は重大事故のリスクを抱え、経済的にも成り立たない原発をなぜ運転するのですか。また、核燃料サイクルが破綻し行き場の無くなった使用済み核燃料の保管に四苦八苦していますが、まずは原発の運転を停止し、処理処分のできない使用済み核燃料を今以上に増やさないことが先決ではないでしょうか。これ以上、子々孫々に重大な負の遺産を押し付けしないで下さい。最近、貴社を含む電力3社が、原

発のテロ対策施設の設置期限の再延長を含めた対応を原子力規制委員会に求めたと報道されました。そうではなく、そもそもテロ対策などが必要な原発の再稼働を中止してください。

国民の過半数は原発の再稼働に反対であり、原発はなくても電気は十分に足りています。貴社の為すべきことは「原発頼み」の体質から即刻脱却し、再生可能エネルギーへ抜本的に転換することです。

以下申し入れます。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓として貴社のすべての原発の運転を中止し、廃炉にしてください。脱原発から再生可能エネルギーに抜本的に転換し、その普及拡大に協力して下さい。
- ・高浜3・4号機、大飯4号機の運転を即刻中止してください。定検中の大飯3号機をこのまま動かさないでください。
- ・40年超運転の美浜3号機、高浜1・2号機を即刻廃炉にしてください。
- ・使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地計画を撤回してください。
- ・日本原燃に六ヶ所再処理工場の閉鎖を求め、プルサーマル計画を撤回してください。

～フクシマからチェルノブイリへ「チェルノブイリの日」のメッセージ～ ジャンナ・フィロメンコさんとチェルノブイリ被災地からの移住者の皆様へ

春の花がいっせいに咲きほころび新緑が眩い季節です。年々歳歳花相似たり・・・と唐の詩人「劉希夷」の古詩が思い出されますが、花は咲いても故郷は戻りません。4月26日と3月11日、8年前私たちと同様に33年前のチェルノブイリ原発事故は、皆さまにとっても決して忘れることが出来ない「悪夢の日」だと思います。

ベラルーシ汚染地区視察の際に、ジャンナさんや移住者の皆さまと想いを同じくしたことが頭から離れません。ジャンナさんが幼少期に遊んだプリピャチ川に流れる小川や森、おばあちゃんの朽ち果てた家やお墓、愛する夫と子どもたちと暮らしたナローブリアの街、気丈にも明るく振るまうジャンナさんの眼がしから熱いものが流れていたことを忘れません。チェルノブイリ、フクシマの悲劇を二度と繰り返してはいけません。いまなお世界中で苦しむ核被害者をつくりだしてはいけません。

皆さまから得た貴重な経験と教訓を活かし、私たちの運動の糧にしたいと思います。

親愛なる友人のジャンナさんご家族、移住者の皆さまの健康を祈念し、節目ある日へのメッセージとします。スパシーバ。



2019年4月26日

角田 政志・中村孝太郎・佐藤 龍彦

(昨年、「救援関西」のコーディネートでチェルノブイリ被災地訪問に参加された福島の方々が、視察・交流を受け入れてくれた現地の「移住者の会」の皆さんへ「チェルノブイリの日」に寄せて送られたメッセージです。)

近況報告～東京電力 清掃支援・草刈り支援に想う

佐藤龍彦（福島県楡葉町）

東京電力の清掃支援が行なわれています。私が住む行政区でも毎年集会所や神社、空き地の廻りなどの草刈りを行なっています。この日は集会所周辺の草刈りですが、行政区の役員として清涼飲料水を差し入れて感謝の表しをします。恒例になっているようです。支援への感謝をするのはあたりまえですが、どこか腑に落ちません。作業をしている東京電力社員が笑顔で返す御礼に戸惑いを感じます。

清掃支援は、事故を起こした東京電力が責任を償うべき復興の手助けをする目的で行われていますが、清掃を行う社員の姿勢は別にしても、東京電力の姿勢に別な思惑があるとすれば見方が違ってきます。信頼回復の手段であれば本末転倒です。善意で行っているとしても、東京電力が今やるべき被害者に果たすべき使命は、第二原発の廃炉を即時決定し廃炉・賠償・除染を確実に進めること。地域住民の安全、安心に全力を傾注すること。これ以外に信頼回復の道はないことを肝に銘じるべきではないでしょうか。

私たちは、電力会社が原発事故前から電気料金から徴収した多額の金を投入し原発推進キャンペーンを行っていたことを知っています。キャンペーンの主たる内容は、原発推進そして安全神話でした。事故後はさすがにトーンダウンしましたが、新たな胡散臭い原発プロパガンダが蠢いています。清掃支援もそのひとつと思えてなりません。清掃日は平日の賃金対象時間であることが何よりの証拠です。作業者は雇用関係のある東京電力の指揮下にあり、思惑がどうあれ指示の下で作業をしなければなりません。信頼回復の一助とするにはあまりにも姑息です。

プロパガンダの蠢きは装う衣をあらたにして、廃炉資料館、中間貯蔵工事情報センター、特定廃棄物埋め立て情報館、楡葉遠隔技術開発センター、福島環境創造センター交流棟など続々とPR館が開設。リスクコミュニケーション施策として「放射線のホント」や新たな放射線副読本を全国の教育関係者、学校に配布するなど、国策として安心、安全PRに躍起です。

繰り返しますが、プロパガンダの行き着く先が過酷な原発事故や、かつては戦争への道につながったことを忘れてはいけません。

「清掃支援に汗を流す東電社員の皆さん。皆さんの本来の仕事は廃炉、賠償、除染を確実にすすめる、被災住民の安全、安心を担保することです。廃炉作業員の雇用、労働条件、環境を守ることです。無権利、法令違反は許されません。事故の責任を認め被害を償い全ての被災者に完全賠償を果たさなければなりません。フクシマ原発事故の反省、教訓は即時に原発維持政策を止め再生可能エネルギーへの転換をはかるべきです。悲劇を繰り返してはなりません。」

2019.5.20



